



Title	ワイルドライフ・アートとしての鳥類画：観察と解剖学的視点から
Author(s)	伊地知, 栄美
Citation	デザイン理論. 2011, 57, p. 152-153
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53597
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ワイルドライフ・アートとしての鳥類画

—— 観察と解剖学的視点から ——

伊地知栄美／大阪芸術大学大学院

ワイルドライフ・アートとは、北アメリカで1960年代から70年代にかけて成立した動物画のことである。ワイルドライフ・アートは単に動物を描くだけでなく、野生生物を生物学的、生態学的に精密精緻に描くことに特徴があり、芸術性と科学的な正確さの均等が求められるアートである。古くはジョン＝ジェームズ・オーデュボン（John James Audubon 1785-1851）やイギリスのジョン・グールド（John Gould 1804-81）などに代表されるような博物図譜の学術的な流れと狩猟画の伝統、そして自然保護運動とも密接に関わりながら発展して完成した。それまでの博物画は種の同定のため生物の形態的特徴のみの描写が重視されていたが、オーデュボンやグールドは動物単体だけでなく、動物の生息する環境も重視して描いている。

ワイルドライフ・アートと狩猟画の違いは狩猟画が人間の立場から人間の活動を中心に描いているのに対し、ワイルドライフ・アートは純粋に野生に生息する動物の生命の営みを描くことにある。

北アメリカではワイルドライフ・アートが安価なリトグラフとして売られ、その販売利益の一部を自然保護団体に寄付したり、アーティスト自身も環境問題に対して強い発言権があるなど、自然保護運動とも深く関わっているアートである。しかし、1980年代頃にはその商業的な性格から公共美術関係者から「単なる博物学的イラスト」として批判されたこともある¹。

日本にこのワイルドライフ・アートがもたらされたのは、1980年代頃のこと、動物雑

誌『アニマ』（平凡社）において「ワイルドライフ・アート」という言葉が紹介された。美術館での展覧会は1995年から1996年にかけてサントリーミュージアム〔天保山〕及びサントリー美術館にて「ワイルドライフ・アート展—カナダの大自然からのメッセージ—」と題して特別展が開催され紹介された。1994年には日本で鳥を描く画家が集まり「野鳥を描く会」が発足し、1997年には主題を鳥以外の生物にも対象を広げて「日本ワイルドライフ・アート協会」と名称を改め、現在ではプロ作家やアマチュア作家など会員120名程が活動をしている。日本では協会自体が直接的な自然保護運動に関わっている段階には至っていないものの、作家個人のレベルでは、何かしらの自然保護団体に所属している人が多いのが特徴となっている。

北アメリカでは狩猟雑誌や自然保護雑誌などで挿絵を描いていたイラストレーターがワイルドライフ・アートを育てていったが、日本の場合は動物図鑑や科学絵本がその役割を果たしていると考えられる。日本で活躍していた作家には、日本の三大鳥類図鑑の挿絵を描いた小林重三の他、研究者向けの専門書の挿絵や福音館書店で科学絵本の中の動物絵本の挿絵を描いていた藪内正幸などがいる。

藪内正幸は、高校卒業後に福音館書店に就職して動物学の研究者向けの専門書の挿絵を描くために、最初の一年は国立科学博物館に所蔵されている動物の骨格標本のデッサンをひたすら続け、動物の解剖学的な知識を身に付けた。休日は動物園に行き、その日に決めた一種の動物の仕草や動きの観察を続けた。

挿絵自体も動物学者今泉吉典の厳しい監修が入り、例えばカンガルーの絵を完成させるために870枚も描き直して、やっとOKが出たというエピソードもある。このようにして、動物の解剖学や生態学、行動学的な知識を身に付けていった。その知識をもとにタブローとして制作された作品がワイルドライフ・アートの特徴を備えた動物画となるのである。

現在ではワイルドライフ・アートはアマチュア作家にも広く認知され、動物学の研究者のもとで動物について学ぶ画家は少数派となったが、それぞれに動物を観察しながら作品制作をしており、様々な技法や視点からバリエーション豊かな作品が誕生している。

本作品では人の身近に生息するスズメを題材として取り上げ、ワイルドライフ・アートを自分なりに定義して制作した。スズメの動きや仕草などは普段の観察からスケッチを行った。春はスズメの子育てのシーズンであり、オスの求愛ソングやテリトリーを巡っての喧嘩や巣作り、そして子育てと最もスズメが活発に活動しているシーズンである。

骨格標本と剥製は大阪市立自然史博物館に所蔵されている標本を見せてもらい、スケッチした。残念ながら、組立てられた骨格標本は所蔵されておらず、見ることはできなかった。骨格標本は頭部を中心にデッサンをおこない、スズメの全体の比率や羽根の質感などは剥製をスケッチしながら観察をした。その他、剥製ではわからなかった翼の構造などは鳥の形態図鑑や羽根図鑑などを利用し、模写をしつつ形態を把握するようにした。またスズメの生態に関する知識などは鳥類学者の佐野昌男や児童文学作家で鳥と人との関わりを研究している国松俊英の著書を参考にした。

本画としての作品では、観察をした上で最も印象に残った生態を描写した。スズメの巣立ち雛が羽根を震わせ、親鳥にエサをねだっ

ている様子を描いた。ヒナはまだ十分な飛翔能力がないまま巣立つ。巣立ち後は親鳥から給餌をしてもらいながら、自分でエサを捕る方法や天敵から身を守る方法を学習していく。ヒナの一年生存率は50%にも満たないといわれており、この時期にカラスや猫などの天敵に襲われ多くのヒナが命を落とす。

本作品ではそのようなスズメの巣立ち後の様子を描写した。巣立ち雛に親鳥が給餌する姿は春には庭先や公園などでよく見かける様子である。ヒナはまだ周りの危険を察知することができず、親のくわえているエサに意識が集中している。しかし親は常に辺りを警戒し危険があればすぐにヒナを安全な場所へと誘導する。この作品では親鳥が観察者である「私」の気配を感じ、羽を身体にぴったりとくっつけ、背伸びをして緊張した面持ちでこちらの様子を窺っている。これ以上この親子に近づけば、すぐにヒナを連れて飛び立ち逃げるだろう。一見のどこに見えるスズメの親子の日常の情景にも、常に死の危険があることを表現した。

注

- 1 ウォーラス・F. ウィルキンズ「カナダの「ワイルドライフ・アート展」によせて」『ワイルドライフ・アート展——カナダの大自然からのメッセージ——』サントリーミュージアム〔天保山〕1995年